

第73回公開シンポジウム

童話の中の子どもたち ～近代日本の子ども観～

◆ プレゼンター 河原 和 枝
甲南女子大学文化社会学科教授 / 文化社会論

◆ パネリスト 小野寺 律 夫
甲南女子大学総合子ども学科教授 / 教育史

◆ 司 会 一 色 伸 夫
甲南女子大学総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

一色：それでは、第73回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「童話の中の子どもたち～近代日本の子ども観～」というテーマで少し引いたサイズで子どもの問題を考えると共に、子どもの本質、子どもとはどういう存在なのか、それが時代と共にどう変わってきたのかということも含めお二人の先生からいろいろなお話をしていただき、考えていきたいと思えます。今日の趣旨は、児童文学には大人の子どもの思いが詰まっています。今日の私たちの子どものイメージ、純粹無垢で特別な存在と見る観点は、日本では大正時代、作家や詩人たちによる「童話・童謡」運動から広がりました。そこではどんな子どもが描かれたのでしょうか。近代日本の児童文学と子ども観の形成について考えていきたいと思えます。河原先生の簡単なお略歴を申し上げます。2009年の4月に甲南女子大学に着任されました。大阪大学大学院人間科学研究科を終了され、一度社会人となられて編集の仕事をされた上で、大学の方に戻られて、武庫川女子大、京都橋大学を経て、甲南女子大学に來られました。では、河原先生よりしく願います。

河原：河原和枝と申します。よろしく願います。私は社会学を専攻しておりますので、今日お話しするのは、児童文学論ではありません。もちろん文学は文学として楽しむのが王道です。けれども、それ以外の使い道もあります。例えば、児童文学は、大人が子どものために、子どもへの思いを込めて書くものですから、その児童文学を分析すれば、大人が子どもをどう見ているか、どう見たいと思っているかも読みとることができます。日本の近代で、どんな子どもが描かれたのか。それはつまり大人が子どもをどう見たいと思ひ、どんなふうにしたいと思ったのかという問題と関わるわけですね。そういう観点から、今日はお話をさせていただきます。以前に中公新書で『子ども観の近代』という本を書いたのですが、その中からかいつまんでお話しします。

日本最初の児童文学『こがね丸』

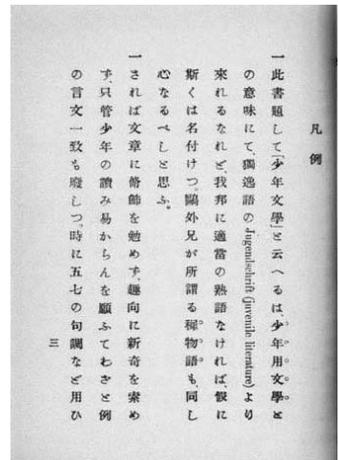
日本で最初の創作児童文学は、明治24年に博文館から出された、巖谷小波の『こがね丸』であると一般に言われています。それまで、児童文学というものはありませんでした。出版社の博文館は、子どもの読み物の出版を企画し、誰に執筆を頼むかと考えて、当時の、日本で最初の文学結社である硯友社——尾崎紅葉や山田美妙、江見水蔭らがよく知られています——から、若くて子どもの描写がうまかった巖谷小波に依頼した。そして書かれたのがこの『こがね丸』という本です。

手に復刻版があるのですが、和綴じの、かわいい本です。



「渡山人著、こがね丸、少年文学第一」と書いてあります。これがトラ、これはウサギですね。今の私たちには郷土玩具に見えますが、当時は子どもたちがこのようなもので遊んでいたわけです。ですから、子どもの読み物にふさわしい表紙です。でもそれだけではなく、実は、『こがね丸』という本は、このような動物が登場するのです。主人公はこがね丸という犬で、登場するのはすべて動物です。あらすじをいうと、犬のこがね丸が親をトラの金眸大王に殺され、牛に育てられて育ち、やがて修行の旅に出ていろいろな動物と出会い、彼らに助けられて最後に親の仇を討つ、という仇討ち物語です。

そして最初のページには、「凡例」として、「此書題して、『少年文学』と言えるは、少年用文学の意味にて、ドイツ語の Jugend schrift より来れるなれど、我国に適當の熟語なければ、仮にかくは名付けつ」とあります。つまり、これまで子どもの読み物がなかったためにその名称もなかった。そこで、ドイツ語からとって少年文学と名付けたと言っています。



では、どのような本であったかという、これが第一ページ目です。「むかし或る深山の奥に、一匹の虎住みけり。幾星霜をや経たりけん、体尋常の子牛よりも大きく、眼は百鍊の鏡を欺き…」と難しい文章なのですが、全部、ルビがふってありますから、それを読んでいけば子どもにも読めました。実は、さりげなく大人の色恋が描かれていたりもしまして、今の児童文学とは様子はずいぶん違います。けれども、それに対して格別、非難の声があったわけではありません。今の子ども観とは違うということがここからも見えます。この本が成功を博し、この後、少年文学叢書は全 32 編、続々と刊行されていきます。これらの大抵は偉人伝で、太閤秀吉など、当時の子どもたちが知っているような有名な偉人が取り上げられています。



「お伽噺」の文化

そして出版社の博文館は、明治 28 年には巖谷小波を編集長に迎えて、『少年世界』という雑誌を刊行します。巖谷小波はそこに、続々と子ども向けの話を書いていきます。彼は、ここから専門の児童文学作家になっていきます。彼は、子どもの読み物を「お伽噺」と名付けました。オリジナルの創作お伽噺のほかに、「日本昔話」24 冊、「日本お伽噺」24 冊。更にドイツ語も得意でしたから、編集長をしながら、ドイツの大学に呼ばれ、2 年間、日本語の教授にもなっていました。そこで、世界のいろいろな話を集め、それを訳して、「世界お伽噺」100 冊、「世界お伽文庫」50 冊——と、まるでミシンを踏むようにおとぎ話を書いたと言われています。

例えば『少年世界』の中に「新八犬伝」という話があるのですが、これは、「桃太郎」と「南総里見八犬伝」を下敷きにして、とても面白いです。8 人の子どもたちが、8 匹の犬張り子、当時の子どものおもちゃで、今でいうと犬のぬいぐるみみたいなものです、それをたまたま 8 人が持っている。それが縁で出会って狗児島に遠征するのですが、8 匹の張り子の犬は、ただのおもちゃではなくスーパードッグ。海も泳げば、敵も倒し、大活躍して、資源豊かな大狗子国を建設するというお話です。これは、背景に日清戦争があり、日本が領土的な野心を持っていた時代ですから、それを反映した話です。けれども同時に、おもちゃの犬が泳いだり闘ったりという楽しいファンタジーでもあります。

小波は、文章もとてもうまく、最初の『こがね丸』は文語体でしたが、その後は、口語体でわかりやすく書いています。例えば、「日本昔話」の「桃太郎」ですと、「すると、不思議や桃の中から、かわいらしい子どもの声で『おじいさんしばらく待った』と言うかと思うと、その桃が、左右にさつとわれて、その中から一人の赤ん坊が、ひょっこり踊り出しました。このでいたらくに驚くまいことか。じいさんもばあさんも、一つよりない肝っ玉をつぶして、あつと言って倒れましたが、赤ん坊はそれを制して『いや、驚くまい、驚くまい、私は決して怪しい者ではない』…」といったふうです。子どもが自分で読んでも、大人に読んでもらっても、楽しい。ですから巖谷小波は、子どもたちにとっても愛されます。お伽のおじさんと呼ばれ、たいへん人気がありました。明治時代に日本は、このように、素晴らしい子ども文化を持つ

ていました。これらのお伽噺はもちろん、子どもがとても楽しめるように書かれている。子どもを楽しませつつ、しっかりと教育して、大人が子どもを導いていこうという考え方があるからです。これは当たり前のように思われますが、次の童話では、それが大きく変わります。

「お伽噺」から「童話」へ

何が起こったかといいますと、大正7年に『赤い鳥』という童話雑誌が誕生します。これを刊行したのは鈴木三重吉という作家で、夏目漱石の早い時期の弟子です。漱石に絶賛され、三重吉は華々しく文壇にデビューします。たいへん人気を博しますが、段々小説が書けなくなって児童文学に目を向けます。そして大正7年、児童文学の雑誌『赤い鳥』を創刊します。表紙だけを見ても、とてもきれいで、ハイカラで、いかにも大正時代の中産階級、ホワイトカラー層の人々の好みを表しているところがあります。今、童話雑誌と言いましたが、明治には、お伽噺の文化が日本中に子どもたちに共有されていた。それを三重吉は否定し、そのようなものは子どもの読み物ではないとして、呼称も「お伽噺」から「童話」へと変えてしまったのです。同じお伽噺ではそのイメージが決まってしまうから、名前も変えて童話としたのです。『赤い鳥』の第1ページ目に書かれている赤い鳥の標榜語、モットーとルビがふってありますが、それを見てゆきましょう。この標榜語は、この後続く『赤い鳥』全部の巻の冒頭に載せられています。



○現在世間に流行している子どもの読み物の最も多くはその俗悪な表紙が多面的に象徴している如く、種々の意味に於いて、いかにも下劣極まるものである。こんなものが子どもの真純を侵害しつつあるということは、単に思考するだけでも怖い。

○西洋人と違って、われわれ日本人は、哀れにもほとんど未だ嘗て、子どものために純麗な読み物を授ける真の芸術家の存在を誇り得た例がない。

○『赤い鳥』は世俗的な下卑た子どもの読み物を排除して、子どもの純正を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、かねて、若き子どものための作家の出現を迎える、一大区画的運動の先駆である。

これほど他の本を罵っているのかと思うぐらい罵っています。そして、子どもは特別な存在であると

いうことを言っていることがわかります。子どもの真純とか、子どものための純麗な読み物、子どもの純性を開発するなどちょっと変わった表現ですが、特別な観点があることがうかがえます。そして一番左端に『赤い鳥』の運動に賛同する作家として、多くの作家を並べています。有島生馬、芥川龍之介、北原白秋、島崎藤村……そして現代名作家の全部を網羅している、と言っています。実際この後、たとえ『赤い鳥』に書かなくても、大抵の作家たちがこの時代に童話を書いたと言われていました。夏目漱石と森鷗外は書いていないのですが、ほとんどの作家たちが童話を書いています。鈴木三重吉は文壇のネットワークを生かし、作家、詩人を動員します。北原白秋は明治の頃から詩人としてとても有名な人でした。その彼に、童謡を書いてもらいます。お伽噺を否定して、子どものための芸術的で純粋な童話を、そして文部省の唱歌を否定して芸術的な童謡を、という大正の童話・童謡運動がここから始まります。

童話・童謡運動と子ども観の変容

そのころ、学校教育の現場ではちょうど、大正自由教育とか、芸術教育運動と呼ばれる運動が巻き起こっていました。そのようなことに関心のある先生方が『赤い鳥』やその他の童話雑誌を教材に使われたわけです。そして、先程表紙を見ていただきましたが、あのようなエキゾチックな新しい雰囲気をお好む都市のホワイトカラー層がこの頃誕生しています。そのような一定の読者層があったこと、学校もその気になったこと、そして文壇を総動員したことが、この運動を全国的な大きなものにしました。今は、児童文学は大抵は児童文学の専門の作家の方が書いておられます。明治期も巖谷小波らがそうでした。ところがこの時代だけは、違っています。つまり一流の文壇作家たちが、突然、童話はすごいとか子どもは素晴らしい、童話だ、童謡だと言って、童話、童謡を書き始めたのです。今で言えば、皆さんはどんな作家が好きですか。村上春樹さん、伊坂幸太郎さん、東野圭吾さんといった方々でしょうか。とにかく、そういった作家たちが突然、童話、童謡を書き始めたという感じです。大ムーブメントになり、童話、童謡の黄金時代がやってきます。『赤い鳥』が成功し、それに続いて『金の船』とか『童話』など有名な雑誌がたくさん出てきます。『金の船』は途中で『金の星』と名前を変えるのですが、今もある「金の星社」という児童書を出している出版社は、ここから始まっています。

このようにして、次から次へと童話、童謡が生まれてきます。では、それはどのようなものだったのか。当時の有名な作家たちが大騒ぎをして童話を書いたのであれば、それはわくわくするような内容だろうと思いますが、じつはそうではなく、あまり面白くありません。童話の中に、なぜ、こんな子どもたちを描いたのか、私は不思議に思いました。その謎を解くのが面白かったのですが、面白くないのが面白いというのが学問の興味ですね。『赤い鳥』やその他の童話雑誌に描かれた子どもたちは、一言でいいますと、次の3つの特徴をもっています。「良い子」「弱い子」「純粋な子」。もちろん、子どもに与える雑誌ですから、良い子を描くのは当然ですが、異常に良い子です。さらに「弱い子」とは何でしょう？そして、純粋さが、半端でなく純粋です。それらをいろいろなかたちで表した童話を具体的にご紹介したいと思います。

「良い子」のイメージ

良い子といえますと、当時は大正時代ですから、明治憲法体制下です。ですから親孝行な良い子とか国に忠義を尽くす良い子が出てきていいはずなのですが、『赤い鳥』には、そういう子どもが殆どいません。どんな子が出てくるかという、たいへん観念的な良い子です。当時の知識人が考えた、こうあって欲しいというような良い子。例えば、「世界同盟」という話があります。これには第一次世界大戦が終わり、世界平和の気運が高まって国際連盟が誕生した時代背景があり、子どもたちもそれに倣って、皆で国になって同盟を結ぶ、という話です。それぞれが日本やイギリス、ドイツといった国になって同盟を結ぶことで助け合い、仲良くなって、親切になる。最後には、「こうしていつの間にか町中の子どもは男の子も女の子も、みんなこの同盟に加わってきました。ですからもうこの町では、子どもの喧嘩などは見ようと思っても見ることはできませんでした。まして、いたずらなどをする子どもは一人もありませんでした」と、結ばれます。こんな話が面白いだろうか?と疑がわれますが、当時は今よりもずっと格差社会で、子どもも皆がじゅうぶんに学校に行けたわけではありません。義務教育であっても丁稚奉公で働く子もいくらかありました。同じ子どもでも、立場や身分が違えば対等には喋れません。ところが同盟を結んだ国同士、となると、対等に喋れるわけです。それまでは、卑屈に腰をかかめていた八百屋の小僧さんが、対等に友達と喋れるようになって、「久しくかがんでいた体がすっきりと伸びたような」明るい気持ちになって喜ぶ場面があります。非常に観念的で、話としてはどうかと思うところもありますが、大人の気持ちからすると、現実の社会はともかく、子どもたちこそは誰もが平等、博愛精神で、仲良くあって欲しいという気持ちがそこに描かれていると見ることもできます。そういう市民社会型のモラルが、『赤い鳥』の良い子の中に見られます。

それから、有島武郎の「一房の葡萄」。これも『赤い鳥』から生まれた名作です。主人公はミッションスクールに通っている「僕」です。僕は、絵が大好きで、思うさま海の景色を描きたい一心で、クラスメートのジム君の西洋絵具を盗んでしまいます。それがばれて、先生のところに連れて行かれるのですが、美しい西洋人の女性の先生は、後悔にさいなまれている僕を見て厳しく責めることをせず、一房の葡萄を与えて許してくれます。やさしく聡明な先生の愛が、心の弱い少年を救い、また級友たちを寛容の精神に導くという、よく知られた愛の物語です。この「一房の葡萄」の主人公の僕は、心の中でとても葛藤し、最後は泣いて反省します。つまり『赤い鳥』では、積極的に行動するというよりむしろ、内面で葛藤する子、そして反省する子、それが良い子として描かれるという場合がかなりあります。また、気立ての良い子、やさしい子、思いやりのある子もたくさんいます。これは、『赤い鳥』と同じ頃に誕生し、童話が大正末期に売れなくなったとき、反対にものすごく売り上げを伸ばしていった雑誌、『少年倶楽部』の良い子と対照的です。『少年倶楽部』は「面白くてためになる」をモットーとし、積極的に行動する良い子がたくさん登場します。戦場で大人も顔負けの大活躍をする子や、苦勞をして勉強し立身出世する良い子などです。『赤い鳥』の良い子は内面的な良い子で、ずいぶんと様子が違います。

「弱さ」と正義

同時に、「一房の葡萄」には「僕は心も身体も弱い子でした」という文章があり、主人公は弱い子で

もあります。『赤い鳥』の童話の中には、たくさんの弱い子が登場し、その弱さもいろいろな弱さがあります。例えば、心の弱さですと、いじいじして、最後までいじけている情けない子どももいれば、身体が弱い子、病気の子、死んでしまう子どももいます。それから、社会的な弱者、社会の一番下の地位にあって虐げられる弱い子どもたちもたくさん出てきます。社会的弱者の例では、たとえば宇野浩二の「天国の夢」では、主人公は孤児の三太郎です。『赤い鳥』には孤児がたくさん出てきます。彼は鍛冶屋さんに拾われ、朝から晩までこきつかわれて働き通しです。三太郎の唯一の楽しみは、夜寝て夢を見ること。夢の中でいつも空を飛んで遊んでいます。ところが夢の中で空を飛んで、地面に降りてきたところを親方に見つかって怒られ、目を潰されてしまうのです。ハッと目が覚め、それは夢だった、よかった、と思うのですが、その後、三太郎はもう夢さえ見たいと思わず、ただ寝ることだけを楽しみにするようになります。それで終わってしまう話です。

当時の作家たちは、弱さへの感受性がとても強かったようです。童話とともに童謡が生まれましたが、童謡にもまた、弱い子のイメージが表現されます。たとえば、皆さんがよくご存じの「赤とんぼ」、歌詞もメロディも悲しい雰囲気があります。そして、この頃の童話が弱さをわざわざ描くのは、弱さは必ずしも否定しなければならぬものではなく、それを描くことに何か意味があると考えていたからだと思われる。

また、弱さは克服されなくても、弱者のために何らかの形で正義が下されるという話を書いた作家もいます。有名な童話作家、小川未明がそうです。未明の「赤いろうそくと人魚」は、新聞に連載されたものですが、その特徴をよく表しています。人魚が人間の世界に憧れ、自分の子どもを人間に育ててもらおうと考えます。その人魚の赤ちゃんをろうそく屋の老夫婦が見つめ、自分たちは子どもがいないので喜んで育てます。人魚は大事に育てられてきれいな娘になり、老夫婦が作るろうそくに絵を描いて暮らします。ろうそく屋さんは山の麓にあり、山の上には神社があって、人々は、そこでろうそくを買って神社にあげていました。ところがある時、見世物師が人魚の話を知り、見世物にするために人魚を買いに来ます。老夫婦は大事な娘を売るわけにはいかないと言いますが、段々と欲に目がくらみ、とうとう人魚を売ってしまいます。人魚は動物を入れる檻の中に入れられ、船に乗せられて売られていきます。と、その時、海が大荒れに荒れて、船が沈んでしまいます。人魚は売られて行く時に、ろうそくに絵を描く暇がないので、さっと赤い色を塗ったのですが、その後、赤いろうそくを神社にあげると海が荒れ、さらに最後には、その町自体が減ってしまった、という話です。何も悪いことをしていない人魚が不幸な目に遭う。弱者を不幸にするそのような社会が悪いということで、社会そのものを滅ぼすというかたちで正義が実現されます。『赤い鳥』にも、そのような未明の作品があります。

「童心」の礼賛

もちろん、純粋な子どももたくさんいます。『赤い鳥』の純粋な子どもは、異常なほど純粋です。そして、良い子、弱い子、純粋な子の3つの要素をあわせ持つ子どもたちもたくさんいます。

例えば、吉田絃二郎の「お銀の歌」のお銀ちゃんは、その典型のひとりです。お銀もやはり孤児で、工場に働いています。お銀は、朝夕欠かさず、亡くなったお母さんから教わったお祈りをしています。「神

様、私は何一つ人様のためになるようなことをすることができません。もし、御心にかないますなら、今日は何か私にできます良いことをさせてくださいまし」とお祈りをする。そして月に一度の休みの日も、仲間の女工さんたちは浅草に活動写真を観にいったりするのですが、お銀は一人讚美歌を歌いながら町を歩くのです。「お銀はほんとうに美しい声を持っていました。お銀の声を聞いていると、どんなに悲しみを抱いている人でも慰められました。どんなに悪い心を持っている人でも美しい心に立ち返りました」。妻と幼い子どもを捨てて旅に出ようとしていた若者は、お銀の歌を聞いて、家族の元に戻ります。巡礼を捕まえてお金を取ろうとしていた悪者たちは、その手を離しましたし、お葬いの席で遺産争いをしていた兄弟も仲直りをします。そして、自殺をしようとしていた目の見えないおじさんと孫も「何だか世界が急に明るくなったような気がする」「本当に、生きてさえいればあんなに美しい歌さえ聞けるんですもの」と自殺を思いとどまるのです。そして、お銀はいいことをしたとは知らず、一日歌いながら歩き、快く疲れて工場に帰り、いつものお祈りをして眠りました、というお話です。

こうした、善良さ、弱さ、純粹さをもった、一言でいえば無垢なる子どもたちが『赤い鳥』から次から次へと生まれていきます。つまり、大正の作家たちは、童話の中で、無垢のすばらしさ、無垢が大事な価値であるということを生懸命言おうとしていた、また、童話の世界は無垢の世界だと言おうとしていた、といえます。ただ、読者である子どもたちがそれを気に入ったかどうか、というのは別の問題です。実際、こうした童話雑誌は大正末期には売れなくなり、それと反比例して『少年倶楽部』が大躍進をしていきます。が、とにかく、大正時代には、このような無垢な子どもがたくさん描かれました。ただし、「無垢」という言葉はあまり使われず、当時はむしろ、子どもの心、「童心」という言葉、表現がよく使われました。そして、この童心がさかんに礼賛されたのです。

先ほどご紹介した「赤いろうそくと人魚」の小川未明や、童謡を書いた北原白秋などが、子どもはすばらしい、子どもこそ大人の理想であるということを言っています。大人が子ども心を失うと、墮落すると。子どもこそ大人の理想だということは、つまり、子どもが大人を導く、という観点であり、大人と子どもの関係が明治のお伽噺のあり方と逆転します。こうした、子どもを特別な、無垢な存在と見る大正期の童話は、のちの児童文学からは「童心主義文学」と批判されます。童心を素晴らしいと讃えるだけで、現実の子どもは描かれていない、子ども不在の文学というわけです。実際、当時の童話は子ども目線で書かれたものではありません。そして、お伽噺から童話へと変わったように、戦後は、子どもの読み物は児童文学と名前も変わり、子ども目線でリアルな子どもを描くべきだという考え方が強くなります。

副次価値としての無垢

ではなぜ、当時の作家たちは、無垢なる子どもに夢中になったのか、ここまで無垢を褒めたたえたのか、ということについて最後に触れておきたいと思います。日本社会は、明治維新以降、上から近代化を推し進めていきます。そして富国強兵、殖産興業ということでやってきた近代化が、一般の人々に浸透していくのが明治末期から大正時代にかけてです。つまり、大正時代には多くの人々が、資本主義が進展する中でその価値観を身につけるようになってきた。そこで重視されるのは、合理主義や

功利主義、人を押しつけてでも自分の業績をあげる業績主義、といった価値です。このような社会の中で、善良さや弱さや純粋さを大事に持っていたのでは、生きるのは容易ではありません。ですから大人は、そのような気持ちにどこかで蓋をしながら生きていこうとします。けれども、やはりそれを失うことはできない。その思い、無垢の理想は、どこかに置いておきたい。それを子どもに当てはめた。子どもは無垢である信じること、当時の知識人たちは産業社会の業績主義、功利主義の中で、いわばバランスをとり、救いを見出そうとしたのではないかと考えられます。だからこそ、この時代に、無垢がクローズアップされ、現実の子ども不在の、観念的な無垢なる子どもが描かれたといえるでしょう。社会学では、社会にとって必要な価値であっても、社会の支配的な価値観（優勢価値）と対立するものを「副次価値」といいます。副次価値は、優勢でない、いわば日陰の価値なのですが、しかしそれをどこかに残しておくことが社会にとって機能的に望ましいので、社会の一部分に局限されたかたちで保存されます。つまり、無垢は副次価値として、子どものイメージの中に局限され、閉じ込められて保持されたのです。

時間がまいりましたので、後は、皆さんのご質問を受ける形で進めさせていただきます。

一色：ありがとうございます。皆さん方もあまり知らない、明治から大正にかけて、子どものことをどのように大人が見ていたか。その辺りが見えてくるようなすばらしい講演でした。では、今の基調講演に対して、教育史、教育学の視点から小野寺先生からコメントをいただきます。小野寺先生は、ご存知のように、教育史がご専門分野で、特にペスタロッチーの教育思想のご研究をされています。では、小野寺先生お願いします。

小野寺：河原先生からの興味深いお話、ありがとうございます。私の番ですけれども、何を話したらよいか。一色先生の方から教育学の立場からと言われましたので、とりあえず、『赤い鳥』の子ども観の性格と、『赤い鳥』の童謡・童話運動の評価について、河原先生のお話にそって、少し述べてみたいと思います。

折しも、甲南女子学園は創立90周年を迎え、今月の末には記念行事があるとのこと。大正9(1920)年、先ほどお話にあった大正自由教育の流れの中で、本学園は出発したようです。校訓は、「清く、正しく、優しく、強く」。「清く、正しく、優しく、強い子」に育てほしいという思いが込められています。ここで、非常に面白いのは、この「清く、正しく、優しく、強く」という子ども観と、『赤い鳥』の「良い子、純粋な子、弱い子」という子ども観の比較です。「良い子、純粋な子」と甲南女子学園の「清く、正しく、優しい子」は、ほぼ同じ内容だと思えますが、「弱い子」というのは、甲南の校訓にはありません。逆に、「強い子」が挙げられています。

これは考えてみれば、当然のことで、校訓つまり教育の理念・目標としては、「弱い子」では格好が付きません。しかし、文学では「人間の弱さ」は非常に重要なテーマですから、目の付けどころが教育とはかなり違います。教育では、「強い子」が目標とされます。ちなみに、「強い子」は『赤い鳥』のライバル誌、『少年倶楽部』の子ども観だそうですが、立身出世主義に立つ一種の教育小説といったも

のが掲載されているので、そのような教育的な意味合いのある子ども観が見られるのだと思います。

『赤い鳥』の無垢・童心の理念は、河原先生のご著書によりますと、イギリスのロマン主義の詩人ワーズワースの影響によるとのことです。教育の世界では、ワーズワースよりも時代的に少し前の人達、ルソーとかペスタロッチーの考えにも、そのような概念が登場します。でも、彼らはこれをストレートに持ち出してきません。ルソーによりますと、純粹・無垢というものは、人間が生まれた瞬間だけの状態であって、おくるみに包まれて、人の手にわたると消えていく。消えるどころか、知恵がつくと共に、損得、打算で動くようになる。だから、彼は純粹・無垢をストレートに教育の理念に掲げることをためらうのです。「エミール」の中の有名な一節ですが、自然人(人間)を作るか、社会人(市民)を作るのか、これは難しい問題であると言って、匙を投げると言いますか、どちらを理想に掲げて子どもを育てていくかについては、曖昧なままで終わっております。自然人というのは純粹・無垢の人ですが、この点、ルソーはすっきりしていません。彼はロマン主義の先駆者ですから、ワーズワースや、したがってまた『赤い鳥』の運動に影響を与えていると思いますが、ルソーの純粹・無垢なるものの取り上げ方と、ワーズワースの取り上げ方を見ますと、文学と教育との違いは明らかです。

ペスタロッチーという人は、この違いがもっとはっきりとした形で出ています。『赤い鳥』には、「悪い子」「ずるい子」がでてこないようですが、ペスタロッチーは心の荒んだ子どもをしっかり見すえます。「知恵がつくと共に、無垢どころか利害打算で動く」人間性の徹底的な探究者ですので、子どもはみんな「よい子」なんて見ません。「悪い子」も「いい子」も、いろいろな子どもがいて、非常に幅の広い見方をします。しかし、「悪い子」「ずるい子」の内側に奥深く潜む、無垢なるものの可能性にも注意深い目を注ぎます。『赤い鳥』の作家たちの捉え方とは違って、リアリズムと理想主義が混じり合った子どもの捉え方をするわけです。

もちろん、文学は子どもの悪をリアルに捉えないわけではなくて、むしろ、人間の悪は文学の本質的なテーマです。けれども、文学といっても、『赤い鳥』の子ども観は非常に独特でして、教育の世界との捉え方の違いは否めません。これが『赤い鳥』の子ども観の性格について、私が考えるところです。

二つ目の問題ですが、『赤い鳥』の運動をどのように評価をするか。河原先生は『赤い鳥』の童話・童謡運動で追求された無垢・童心の理念を副次価値と位置づけておりました。これは、社会学的な見方だと思います。副次価値というのは、社会の中心的な価値に対して副次的であるという意味で、確かに『赤い鳥』の理念は富とか権力にはつながりませんので、その点から見れば副次的と言えるかもしれません。しかし、富や権力つまり経済や政治の視点ではなくて、教育の視点から見ると、無垢とか童心の理念はなかなかのものに思われます。

目の前に子どもがいます。この子どもどのように関わっていくか。かける言葉の一つひとつ、働きかける行為の一つひとつ、これには人間、いかに生きるべきか、いかに行為するべきかという主体的な価値判断がともないます。大げさなことだとも思いますが、このような価値判断が一つひとつの言葉や働きかけを支えているということは、例えば何か問題があって、ぎりぎりの状況になった場合には、そのことがはっきりとわかります。主体的な価値判断がともなうということは、これは、教育という実践の基本的な特質です。

さて、ここで、この価値判断を支えるのが、子どもを可愛いと思う感情ではないか。そして、この感情を刺激するのが純粹・無垢、無垢な子どもの可愛さではないかと思います。ちなみに、人の子も含め、動物の子どもの可愛さというのは、生き残りのための生物学的な戦略ともいわれたりします。学生を引率して、保育園に観察実習に出かけたときなど、園の門をくぐる前に、学生たちは園庭で遊んでいる子どもを見て、「可愛い!」と早くも歓声をあげたりします。そのように引きつけられる子どもの無垢な可愛さは、生物学的根拠を持った子どもの本質的な性質なのかもしれません。

でも、ここで、非常に厄介な問題が発生します。子どもを可愛いと思う感情、そして、可愛いと思う感情を引き起こす純粹・無邪気の像が教育を支えるとき、ひとつの抜き差しならないジレンマに直面するからです。というのも、可愛いと思う感情がなければ、教育はうまく回らない。でも、可愛いと思えない場合がある。とうてい無垢とは言えない場合がある。手に負えない、実に難しい子もいますので、可愛く思えなくなる。それが正直なところ。そうすると、教育は管理や統制になります。額に皺をよせて、子どもを縛ることばかり気を使うようになり、自分の仕事に生きがいを感じられなくなる。そのような矛盾、ジレンマに陥ってしまうわけです。そうなりますと、良心的な人ほど、自分を責める。その意味では子どもの無垢とか、無垢な子どもの可愛さというのは、諸刃の剣なのです。非常にいい面もあるのですが、危険でもある。純粹・無垢の理念というのは、ひとつのイデオロギーとなってしまっ、教師や保育者を内側からも、外側からも押しつぶします。

では、この厄介なものとのように付き合っていけばよいのか。子どもの捉え方に幅をもつこと。すなわち、「悪い子」も「ずるい子」もいる、と。このように子どもを見ることを罪深いなどと考えない。子どもをリアルに見たらどうだろうか。しかし、その際、大事なものは、無垢なるものが可能性として潜在しているかもしれないと考えること。これが大事な点ではないかと思います。ペスタロッチー流のリアリズムと理想主義が混じり合った子どもの捉え方です。彼は、可能性として潜在する子どもの無垢なるものを「確信」していたようです。さんざん辛酸をなめたうえで達した境地のようです。私たちは、なかなかそのようにはなれませんが、焦らず騒がず、「そのうち、なんとかなるだろう!」くらいな気楽な気持ちで時を待つ。それでちょうどよいのではないかと思います。

現代の私たちは、『赤い鳥』で提起された子どもの純粹・無垢なるものを、教育の実践のより所としつつも、それに縛られて自分の首を締めないようにする。そうすれば、『赤い鳥』の童話・童謡運動を自分なりに読み変え学んでいく、そのような学び意味が十分あるのではないかと思います。

以上、二点にわたり、教育学の立場から河原先生がお話くださった内容について、私の意見を述べさせていただきました。

一色:ありがとうございました。たいへん奥深いコメントをいただきました。では、もう少し、河原先生、小野寺先生がお話になったことを詰めていきたいと思っています。教育学的なお話としては、純粹無垢というのが一つの大きなテーマとしてそこに横たわっている。但し、それを大正時代のその考え方をそのまま汎用的に用いるのではなくて、それぞれの教える立場にいる人が、読み変えて学んでいくことが必要ではないかというお話がありましたが、そのような視点について、河原先生はどのようにお考えですか。

河原：おっしゃる通りだと思います。小野寺先生がおっしゃったように、文学と教育学では無垢に対する態度の違いがありますね。大正時代の童話では、文学の機能の一つとして、作家自身の自我を解放するということがあると思います。今日、ご紹介しました童話も、殆どが男性作家のもので、大正期の童話はほとんど男性が書いています。彼らは、子どもに託して、自分の無垢を語りたいということがあります。ですから、ある意味で自我解放の装置として童話が成立していたという側面もあるかと思えます。それをそのまま受け取って教育に活かすのは不可能です。しかし、無垢の理念の重要性を、いい部分を上手に抽出しようと言ってくださったのは、教育として素晴らしいと思います。もう一つ、小野寺先生が興味深いことを言ってくださいました。弱い子どもに対して、本学も強い子を育てるといふ、もちろんそれは大事なことです。教育は強い子に育てなければならない。しかし、文学が弱さを強調するのは、それはそれで大事なことです。例えば、『少年倶楽部』などが、強い子をどんどん出していった。そして、どうなったかという、その強い子に憧れて行動する良い子で邁進していったのが、国家主義につながっていった。国家主義や軍国主義の子どもを育てることにもなってしまったという側面があります。つまり、強いことに対して、どこかで疑問を持つ姿勢というのも文学の力ではないかと思われまます。

一色：ありがとうございました。その時代の背景からすると、確かに自分たちの思いなどを子どもの心に託して書いていった側面があったと思います。文学というのは、そのような人間の内面を描いていくことです。時代としては、国家主義、産業化の進展、それから、『赤い鳥』などの雑誌がたくさん出ていったわけです。メディアがそれを拡販していった時代ではないかと思えます。それが所謂、河原先生のいう副次的な部分ではなくて、主流の方では、強い子どもとか国家主義や高度産業化などの波の中で子どもたちがそういう方向へ変わっていった時代だったかなと思います。では、先程、教育的な視点から小野寺先生からコメントをいただきましたが、この『赤い鳥』、その前の明治時代の巖谷小波に表されているような子どもを捉えた見方、これをどのように、今の現代に活用していったらいいのか、今の時代の子どもをどう考えたらいいのかというのは、社会的にはどうでしょうか。

河原：近代社会に生きている以上、私たちは合理主義や業績主義を捨て去ることはできません。そして無垢の価値も同じように捨てることはできません。産業社会の価値観が強ければ強いほど無垢の価値も大事であると痛感します。ですから、これからもずっと私たちは、子どもを無垢だと思いたいし、思い続けていくのではないかと思います。

一色：思い続けるだけではなくて、やはり、社会の中での子どもの立場や具体的な教育の中で実践されるということがあるかと思えます。そういう意味で小野寺先生、今の現代社会において、この純粋無垢なるもの、それを教育者一人ひとりがというお話を伺いましたが、教育ということから考えて他に何かお考えがありましたら、コメントをいただけますか。

小野寺：確かに社会的に考えますと、優勢価値というのがあります。しかしそれは、社会学の観点

によるものと思います。教育学の観点からすれば、経済や政治が優勢価値で、教育が副次的な価値だとは考えません。教育も経済や政治と並んで、社会を形成する基本的な重要な機能です。そのような観念にたつとき、無垢というのは子どもの教育にとって大事なものと思っています。そして、もう一つ。先ほど、生物学的な戦略と言いましたが、この無垢の可愛さ、嘘のない打算のない赤ちゃんの無垢というのは、普遍的な何かであって、それがあつた条件においてある形をとってとりあげられる一種の普遍性という側面を考える必要がある。だから、これをあまり歴史的、社会的に相対化しすぎると、「無垢」イデオロギーの側面しか見えなくなる。教育一般に通じる原理かもしれないので、一人ひとりの教育観、子ども観のひとつの理想として、自分の実践を支えるひとつの原理として、心の奥にしまいながら大切に持っていく。しかし決して他者には押しつけない。そういうことだろうと思います。

一色：そうしますと、例えば、今ここで、ここにいる学生は、これから教育者なり、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭になる、それは個人的な奥のところでそれを持ってというような辺りが、実際に子どもと接する場合に具体的にはどのように伝わっていくのでしょうか。

小野寺：保育実習とか幼稚園実習の感想を聞くと、大学とは違って、世間に出ていきますから、やはりつらい、たいへんだつた、と。しかし、子どもの顔を見ると、ホッと救われる。つらかつたけれども、赤ちゃんの顔を見ると救われたと話してくれたりします。だから、一人ひとりは無垢なるものの意味を非常に身近に体験していると思います。概念的に表現できるかどうかは別として、具体的な実践の場面において、そのような基礎体験はみんなしていると思います。

一色：では、もう少し伺いますが、先程、教育というのも副次的ではなくて、社会を構成する基本的なものであるということで、一人ひとりが心の奥底にそれを持って、子どもにいろいろな格好で教育がなされていけば、国家主義なり、いわゆる大正期の優勢価値の社会には、これからの時代はならないということでしょうか。

小野寺：民度というか、歴史が野蛮から文明・文化へと進んできましたが、まだまだ野蛮な面がありますので、長い時間がかかると思います。人は別の考えが出てくると、すぐに乗かえる。『赤い鳥』の幾人かも軍国主義に乗かえていったのです。考え方に幅をもっていれば、安易に変な方向に流れなかつたかもしれません。もっとも、個人がいくら志操を堅固にして、幅の広い考え方を持っても、暴力的な国家権力に抵抗できない時代だつたかもしれませんが、幅を広く人間なり社会を見るときは、それなりに大きな抵抗の力になるのではないか。『赤い鳥』の人たちは、ある意味とても考え方の幅が狭かつたから、軍国主義に乗かえ、軍国少年をつくる方向へ流れていったのでしょうか。

一色：ありがとうございました。では、学生の方で質問、コメントなどありますでしょうか。

学生 A：『赤い鳥』の内面的な良い子が表わされているものと、『少年倶楽部』で行動する良い子が表わされている文章では、子どもたちが受け取る気持ちとかは変わってくるのでしょうか。

河原：そうですね。当時の子どもたちにとって、『赤い鳥』はそんなに面白くなかったようです。評論家の佐藤忠男さんは、子ども時代に『少年倶楽部』に熱中されたそうで、『赤い鳥』はいつまでも今の童心を大切にしていなさいと言っているようで、大人のようにがんばって生きたいと思っている子どもにとっては、まるで、小馬鹿にしているかのように感じられた、とおっしゃっています。ですから、子どもに訴える力は弱かったと言わざるをえません。知識人の考える無垢の弱さであったと思います。それが『赤い鳥』の欠点でもあります。やはり読者には、行動する強い子どもの方に遥かに魅力があると思います。

一色：他に誰かいますか。

学生 B：今の絵本などの子どもの読み物より、昔は残酷な言葉が使われていると思ったのですが、今はそのようなことがあると批判があるのに、昔はそのようなことで批判はなかったのかと感じました。

河原：そうですね。子ども観と連動して、言葉に対する感受性も異なりますね。それから、童話中の女性の描き方についても、ひとことつけ加えたいと思います。童話作家たちは、このように無垢を礼賛し、子どもは素晴らしいと言っているのですが、かなり女性を無視しています。子どものことにはこのように夢中になったのですが、やはり当時の社会の男性中心主義を表す側面があります。例えば『赤い鳥』を主宰した鈴木三重吉は、「ぼっぼのお手帳」というとてもかわいい童話を書いています。「ぼっぼ」という鳩の話です。二羽の鳩がすずちゃんという赤ちゃんが生まれるまでの話をちゃんと手帳に書いています、という話ですが、実は、そのすずちゃんを、お母さんが生んだのではなく、お家が生むのです。「お父様は、いつすずちゃんを生んでくれるのかと言って、毎日、お家に聞きました。お家は、お父様とお母様とに、明日はすずちゃんを生んであげますといいました。その晩、お母様は、すずちゃんの寝る小さな赤いお布団をちゃんと敷いてその傍へやすみました。それからあくる朝、目を覚ましてみますと、お家はちゃんとすずちゃんを生んでくれていました」というのです。もし、私が童話を書くのであれば、お母さんが産んだと当然書きますが、いかにも当時の男性の童話だと思われる。これも『赤い鳥』の限界だと思います。

一色：どうもありがとうございました。それでは、時間となりましたので、ここで第一部を終わります。

【休憩】

一色：それでは、第二部を始めさせていただきます。コメント、質問を受けてディスカッションを進めていきたいと思います。

一般A：すごいと思うことが2つありまして、1つ目は先生の美しさです。2つ目は、社会学から文学へのアプローチがすごいと思いました。また、その中でもなぜこのようにレトロな文学をとられたのでしょうか。

河原：社会学の中に、知識社会学というジャンルがあります。その中に、誰もが知っていることを知識と見て、それがどのようにして形成されたか、どのような機能を果たしているのかを考える立場があります。私たちが常識だと思っていることも、どこかで形成されたものであるわけですね。それは一体、どこでどのように形成されて、どのような働きを持っているのか、そうした知識社会学的な観点が先にありまして、児童文学の中で評価の高い『赤い鳥』があまりに面白くないと思い、なぜ、こんなに面白くないものに作家たちが夢中になったのかと疑問に思うところから、知識社会学的な興味が湧きました。

一色：では、次の方どうぞ。

一般B：大阪から参りました。『赤い鳥』というのは、雑誌で出されていたわけですが、それを買う階層というのは、かなり限られている方ではないかと思うのですが、それはどのような階層の方を目指して出版されたのでしょうか。

河原：おっしゃる通り、限られておりました。先程、都市中間層と申しましたが、『赤い鳥』を買ったのは、都市のホワイトカラー層です。サラリーマン層、弁護士、医者などホワイトカラーの上層、いわゆる近代的な家庭を営むような階層で好まれました。それから地方では、学校です。自由教育運動などが盛んでしたから、学校の先生が買って、そして、子どもたちに学級文庫という形で読み聞かせることが多かったのです。『赤い鳥』は、表紙を見ても、とてもハイカラでブルジョワ的なイメージが強いですが、『赤い鳥』の投稿欄を見ますと、地方の学校の子どもたちの方が、綴り方が上手です。鈴木三重吉が綴り方の指導をしたのはご存知かと思います。地方の子どもたちは、都会の子どもたちとは全く違う、現実の厳しい話を作文に書いています。そういう点では、多面的な側面があります。

一般B：大阪だけに限らず、所謂、同和教育、部落解放運動の教材などに、『赤い鳥』が使われていたことがあります。その中で「赤いろうそくと人魚」や今お話の中に出てきた両親のいない子どもなどを取り上げた教材がよく用いられていました。同和教育の教育として使われる意味があるのでしょうか。

河原：例えば小川未明は、後には国家主義に傾いていくのですが、社会的な問題意識から、大正9年の日本社会主義同盟の結成に関わっています。彼は資質からいってロマン主義ですから、「赤いろうそくと人魚」のように町全体を滅ぼすという形で正義を表現しますが、とにかく社会構造を批判しようとします。「赤いろうそくと人魚」も登場人物はおじいさん、おばあさん、人魚と、固有名詞が出てきません。社会の底辺になればなる程、自分が生きるのに精いっぱい人で冷たかったり、不人情だったりする。

それは、個人の問題ではなく、社会の問題だと考え、個人の因果応報としてではなく、社会構造の問題としてとらえ、最後は町全体を滅ぼしてしまいます。同和問題とも、社会批判としてつながるものがあったのかもしれない。

一般B：もう一点伺いたいのですが、「お銀の歌」などは、キリスト教の宣伝のように感じます。例えば、ミッションスクールの関係などもあるのでしょうか。

河原：「お銀の歌」を書いたのは吉田絃二郎という作家です。彼は確かに宗教的なところはありますが、それに限らず、異常に純粹で感傷的なものをたくさん書きました。それがとても売れまして、ベストセラー作家になり、著作集や全集がたくさん出ています。この他にも、とてもマイナーな人ですが、子どもを拝めとまで言った人もいまして、純粹無垢を特別視した時代であったと思います。大正期は宗教ブームの時代であり、感傷の時代でもありました。そのために吉田絃二郎も流行ったのではないかと思います。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般C：私の小さい時に『少年倶楽部』がありまして、金持ちでもありませんでしたので、友達から借りてよく読んでおりました。一生懸命に読みますので、よく記憶に残っているのですが、今ではそのようなものを読むというよりもテレビを見てしまいます。ですから、読むという力が非常に弱くなっていると思います。教育としてそのようなことをもっと教えて、とにかく読むことの楽しさを教えていただきたいと思っています。

一色：これにつきましては、お二人の先生からコメントをいただきましょう。まずは河原先生お願いします。

河原：社会学は、何でも相対的に見る癖がありまして、現代は本を読むのが廃れていてよくないというお話ですが、社会というのは、何か新しく出てきたものを非難して教育の立場を守るところがあります。実は本を読むのがいけないと言われた時代があります。それは明治時代ですが、明治にお伽噺が盛んになるまでは、学校教育の現場では、勉強以外の本を読むことはいけないこととされました。お伽噺にも、教育者は反対していました。それはなぜかということ、本当のことを教えないから、リアリズムではないからだということでした。やがて巖谷小波らの努力によって、本はいいものだととなりました。本がいいものになると次に否定されたのが、昭和の初めごろの映画で、映画を観るから若者が駄目になると非難されました。その次がマンガですね。マンガを読むから本を読まなくなる。そしてマンガが日本の誇る文化だと言われるようになると、今度は、テレビゲームがあるから子どもが駄目になると。もちろん本を読むのは大事ですが、次から次へと何か新しく起こったものに対して非難が出るということは割合とある、と社会学は、結構外から相対的に見えています。

小野寺：メディアとしての文字文化と映像文化について、ご質問は、文字にもっと親しむ方向に導く必要があるのではないかとということでした。なるほど、映像は現代の重要なメディアです。とはいえ、人類の歴史は文字と共に発展し、人間の思考やイマジネーションは文字文化を通して、また、印刷術の発明を介して発達してきました。そして、そのようにして発達してきた文字や文章を読み解く力は、他に代えがたい固有な価値をもつのではないか。だから、映像が新しいメディアとして、文字の力を越える側面があるとしても、また、映像文化が社会に浸透すればするほど、そのような読解力の重要性はむしろ増すのではないか。私はバランスの問題を考えます。一方に流れない。映像も文字も。文字については、すこし字の詰まった文章を読む。そのようなバランスの中で、人間ならではの知性が文字を通して開花していくならば、教育はそれにふさわしい環境づくりに目を向けることが大切です。しかし、これは子どもメディア学専門の一色先生からお答えいただく問題でしょう。

一色：河原先生がおっしゃったように、最初は、世の中に起こってくるとそれに対する反対ということがあって、明治初期は本自体も批判的だったということですが、もう少し詳しくいうと、映画、マンガ、テレビなどは、大宅壮一さんは一億総白痴化と言われたりしていました。それが今や、ゲームがどうもよくないのではないかとようになってきています。私自身は、やはり先程、小野寺先生がおっしゃいました、子どもの思考の発達や人間が持っている部分のいろいろな要素の論理性などは、抽象化された文字によって構築していくというような部分があると思います。それと共に、人間は感性を持っています。その感性を育てるのは、視覚聴覚、視聴覚メディアがその感性に訴えかける部分があると思います。そこには、それぞれの特徴のメリット、デメリットがありますので、教育となると、どちらだけがあればいいということではないと思います。教育はその辺りのバランスをとってやっていくことではないかと思っています。では、他の方いらっしゃいますか。

一般D：いろいろインスパイアされるお話でしたが、私自身は、歴史的な興味を持っていて、世の中の大きな動きとして、大体 450 年に 1 回、がらりと時代が変わってしまうと思っています。それを、この時代の前後で考えてみると、この前の時代というのは、明治半ば頃ですが、この頃に例えば、音楽改良運動が行われて、その時の改良と言っていた人たちの言い分というのは、この『赤い鳥』のモットーと殆ど一緒です。お話そのものも、明治の半ば頃から海外の音楽や紹介もありますし、日本の坪内逍遙などが出てきて盛んになっていくのですが、その辺りとの違いを考えると、『少年文学』尾崎紅葉の「侠黒兎」という翻訳ものがありますが、これを調べてみるとちょうど 18 世紀から 19 世紀の変り目のマライア・エッジワースというイギリス人の抄訳であることがわかったのですが、この話は結局、家庭の子ども向けの教訓話のようなものをたくさん書いて、当時とても有名だったようです。考えてみると、この大正時代の『赤い鳥』も教訓がないかと言うと、やはり教訓がある。明治との違いは何かというと、明治の時はストレートでそのまま出ているのが、この『赤い鳥』ではポエジーというオブラートに包んで出されている。そこが一番大きな違いではないかと思いました。その辺りについてどうお考えかということと、もう一点は、もう少し新しい 19 世紀半ば頃から家庭小説が欧米で流行ってきます。

その影響はないのか。もしこの辺りを検討されたことがあればお話を伺いたいです。

河原：家庭小説については、良く存じませんが、その系譜では明治に若松賤子らが活動しているのではないかと思います。ただ、若松賤子は『女学雑誌』を拠点にしていたから、非常に少数派、ごく一部のエリートの読み物であったので、それほど一般的ではないということで、知識社会学、誰もが当たり前と思っているような知の共有の部分では、共有されているものではないと考え、ここでは取り上げておりません。それから、『赤い鳥』の表現がソフトになっているとおっしゃったのは、その通りです。『少年倶楽部』ですととてもストレートに主張するところを『赤い鳥』はとてもソフトに示します。例えば、兵隊に憧れていた少年がいて、兵隊さんの行進を見ていたときに、彼の帯が解けているのをさっと直してくれた兵隊さんがいたので、ますます好きになった。ところが、それから少年がわざと帯を外して待っていても、その後続兵隊さんは、一度も彼に目を留めてくれなくなったので、彼は段々と兵隊さんが嫌いになった、という話があります。それは一体何を言っているのか。軍国主義に反対しているのかもしれないかもしれませんが、曖昧な感じですが。また、鈴木三重吉は軍国主義に反対ではなくて、国粹主義的なところがあり、私設の小さな組織で少年を軍隊的に訓練したりしています。しかし『赤い鳥』になると、それがストレートに出ずに柔らかく美しい形で出てくる。三重吉の一種のロマン主義の表現ではなかったかと思われまます。

一色：他の方いらっしゃいますか。

学生 C：総合子ども学科の3年生の学生です。河原先生が、子ども学のシンポジウムを始める前に目的として大人が子どもをどう見ていたかというお話をされていたと思うのですが、このレジュメにある絵で、『赤い鳥』と『こがね丸』の絵は、かわいいですが、この狼の絵はとてもリアルに描かれているのですが、これは目的である大人が子どもをどう見ているかというのに関係はあるのですか。

河原：そのように見る事ができると思います。明治維新以後、子どもは学校に行くことにはなりましたが、だからと言って、急に江戸時代からの子ども観が変わるわけではありません。『こがね丸』がそれまでの子どものイメージを引きずっているのは当然で、子どもを今日のような子どもとして見ていない点は確かにあります。絵にもそれが表れているかもしれません。

一色：今の学生の質問に関連するのですが、総合子ども学科の赤西先生から一つ質問がきております。第二部は、授業で出席できないのでということでお受けしております。

『赤い鳥』というのは、元々3つの良い子、弱い子、純粹無垢な子という特徴があり、その中の弱い子の部分でいろいろなテーマで話を進めて参りましたが、その弱い子どもというのは、文学的に見た表現であって、文学の美意識ではないだろうか。明治から大正時代に大人が子どもを導いていく『赤い鳥』の子ども像とは、いずれも大人の視点で子どもを扱っているのではないか。もっと、子どもの視

点を考える必要があるのではないか。子どもそのものを考える必要があるのではないかというコメント、質問がきております。これについていかがでしょうか。

河原：今日お話ししたのは、大人が子どもをどう見たかということであり、私自身もそこに関心があります。子ども自身が何者なのか、というのは、それも社会の知であるといえます。社会が子どもをどう見るかということが子ども自身の経験をも変えていきます。子どもは大事にしなければいけないという知の社会であれば、子どもは大事に育てられ、そのような人間になるわけで、社会が子どもをどう見るかが子ども自身にも影響を与えたいと思います。が、本質論は、社会学にあまりなじみませんので、それは小野寺先生におうかがいしたいと思いますが、いかがでしょうか。

小野寺：子どもが何者かということですが、ここでは、純粹・無垢という大人の捉え方が、当の子どもにどのように受けとめられているかという点から、子どもそのもの、子どもの視点というものについて、少し述べさせてもらいます。例えば、綺麗な花。花には意識がありませんので、自分がどのように見られているかわかりません。しかし、子どもは意識を持っていますので、赤ちゃんでも、大人のそのような捉え方、大人のまなざしはわかります。でも、子どもに尋ねれば、大人からの一方的な決めつけは勘弁してほしい、というのが本音かもしれません。純粹・無垢はドイツ語で Unschuld、罪のない、墮落以前の状態という意味ですから、少し気の利いた子どもであれば、気恥ずかしく思うのが普通でしょう。これが、まず、子どもそのもの、子どもの視点からの反応ではないかと思えます。たしかに、そこには大人の視点とのちぐはぐさが見られ、滑稽な感じもします。とはいえ、そのような大人の視点であっても、純粹・無垢なるものは、前に述べましたように、教育の実践の少なからぬ支えとなるのも事実です。くわえて、大人のまなざしが功を奏して、「自分をそのように見てくれる人を裏切ることはできない」という、大人への信頼と愛情が醸成されるならば、それ自体、捨てたものではありません。照れくさい、気恥ずかしいと思いつつも、悪いことはできないと思う子どもの気持ち。これも、また、子どもそのもの、子どもの視点からの反応ではないでしょうか。

私には子どもの視点なるものが大人の側から事あらためてもちだされると、大人から押しつけられたもの、大人の視点の別名のように思われます。あるいは、このような私の理解も一種の押しつけかもしれません。子どもそのもの、子どもの視点というものをどのように考えるか、これは、とてもむずかしい問題で、このむずかしさの自覚こそ必要なんだろうと思えます。

一色：今日はお忙しい中ありがとうございました。明治時代の大人が子どもを導いていくというのと大正時代になり、今日の話には出てきませんでしたが、河原先生のご著書には書かれていますが、北原白秋の「子どもこそ大人の理想だ、子どもの心を失うと大人は墮落する」。この言葉に私自身は非常に深く感銘を受けておまして、やはり、子ども自身もそれは知的なレベルで、足りない部分はあるかもしれないけれども、確かに生物学的な話もありましたが、この世に生まれて生き活きと生きているわけです。そこで一体何が起きているかということをもう一度振り返って、その子どもたちの幸せがより多く

達成される社会になればいいと非常に抽象的ではありますが、そう思いました。今日はどうもありがとうございました。